

博多 187

— 第238次調査報告 —

2022

福岡市教育委員会

博多 187

— 第238次調査報告 —



遺跡略号 HKT-238
調査番号 1958

2022

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書はホテル建設に伴う博多遺跡群第 238 次調査について報告するものです。この調査では、15～16 世紀頃から江戸時代にかけての遺構を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社 NARUMI プランニング様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月 24 日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

- 本書は、福岡市教育委員会がホテル建設に伴い、福岡市博多区店屋町 186 番 1、186 番 2、187 番 3 地内において令和 2 年 1 月 15 日から令和 2 年 4 月 24 日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第 238 次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。
- 遺構の実測と写真撮影は佐藤一郎、上角智希が行った。
- 遺物の実測と写真撮影は上角が行った。
- 製図は上角、長野千重、貝原知子が行った。
- 本書で用いる方位は磁北である。
- 本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
- 座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の多角点から引照した。
- 本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
SB 磁石建物、SE 井戸、SK 土坑、SX その他、SP ピット
- 本書に関わる記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 本書の執筆・編集は上角が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	238 次	調査略号	HKT-238
調査番号	1958	分布地図図幅名	49 天神	遺跡登録番号	401320121
申請面積	213.73 m ²	調査対象面積	126 m ²	調査面積	141.3 m ²
調査期間	令和 2 年 1 月 15 日～令和 2 年 4 月 24 日		事前審査番号	2019-2-99	
調査地	福岡市博多区店屋町 186 番 1、186 番 2、187 番 3				

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 近世・近代の遺構と遺物	9
3. 中世後半の遺構と遺物	13
第4章 まとめ	17

挿図目次

第1図 博多遺跡群位置図 (1/25,000)	2
第2図 第238次調査地点位置図①(1/5,000)	3
第3図 第238次調査地点位置図②(1/1,000)	4
第4図 第1面遺構配置図 (1/80)	6
第5図 第2面遺構配置図 (1/80)	7
第6図 第3面遺構配置図 (1/80)	8
第7図 調査区北壁および1区ベルト土層図 (1/60)	9
第8図 近世・近代の遺構実測図①(1/60, 1/40)	10
第9図 近世・近代の出土遺物実測図①(1/3)	10
第10図 近世・近代の遺構実測図②(1/60)	11
第11図 近世・近代の出土遺物実測図②(1/4)	12
第12図 中世後半の遺構実測図 (1/60)	14
第13図 中世後半の出土遺物実測図①(1/3, 1/4)	15
第14図 中世後半の出土遺物実測図②(1/3, 1/4)	16

写真目次

写真1	1区第1面全景（北東から）	18
写真2	2区第1面全景（北から）	18
写真3	1区第2面全景（南から）	18
写真4	2区第2面全景（北から）	18
写真5	1区第3面全景（東から）	19
写真6	2区第3面全景（北から）	19
写真7	SX31（南から）	19
写真8	SE01（南西から）	19
写真9	SK05（南東から）	20
写真10	SK07（南東から）	20
写真11	SE27井戸枠（南西から）	20
写真12	大溝SD30（東から）	20
写真13	SB32（北西から）	20
写真14	SK33（北東から）	20
写真15	調査区北壁土層（南東から）	20
写真16	SK33出土石油ランプのガラス容器	21
写真17	SK33出土石油ランプの口金	21
写真18	SE02出土鬼瓦	21
写真19	SE04出土軒丸瓦	21
写真20	SK20出土硯	21
写真21	SK39出土象嵌青磁	21
写真22	第1～2面包含層出土陶器碗	21
写真23	第1面出土青白磁菩薩像	21
写真24	SK55出土象嵌青磁	21

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区店屋町 186 番 1、186 番 2、187 番 3 におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 31（2019）年 4 月 22 日付で受理した（事前審査番号 2019-2-99）。

申請を受け、埋蔵文化財課事前調査係が令和元（2019）年 9 月 17 日に試掘調査を行った。試掘の結果、GL-200 cm 以下に中世以前の遺跡が残っていると判断された。遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、設計変更が困難であることから記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

令和元年 12 月 27 日付で株式会社 NARUMI プランニングを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和 2 年 1 月中旬から 4 月にかけて発掘調査を、令和 2～3 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社 NARUMI プランニング

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度・資料整理：令和 2～3 年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長

菅波 正人（元～3 年度）

同課調査第 1 係長 吉武 学（元・2 年度）

本田浩二郎（3 年度）

庶務：文化財活用課管理調整係

松原加奈枝（元・2 年度）

井手 瑞江、内藤 愛（3 年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長

本田浩二郎（元・2 年度）

田上勇一郎（3 年度）

同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎（元・2 年度）

森本 幹彦（3 年度）

同課事前審査係文化財主事

朝岡 俊也（元年度）

山本 見平（2・3 年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第 1 係主任文化財主事

上角 智希（元年度）

佐藤 一郎（2 年度）

整理担当：埋蔵文化財センター 保存分析係長

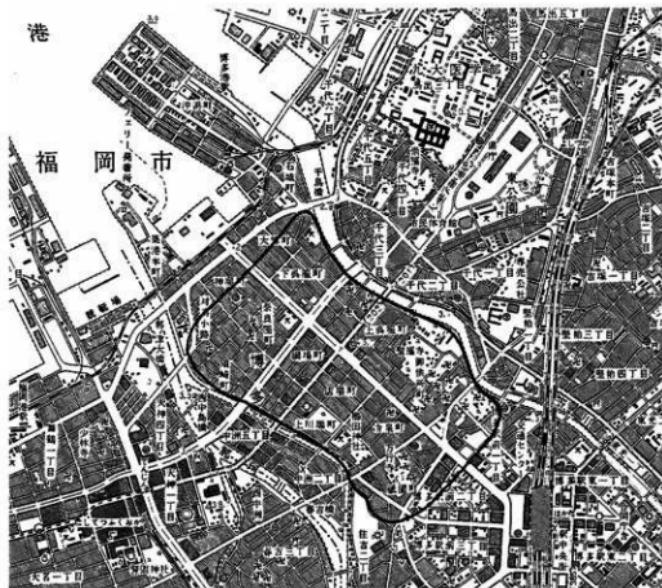
上角 智希（2・3 年度）

第2章 遺跡の立地と環境

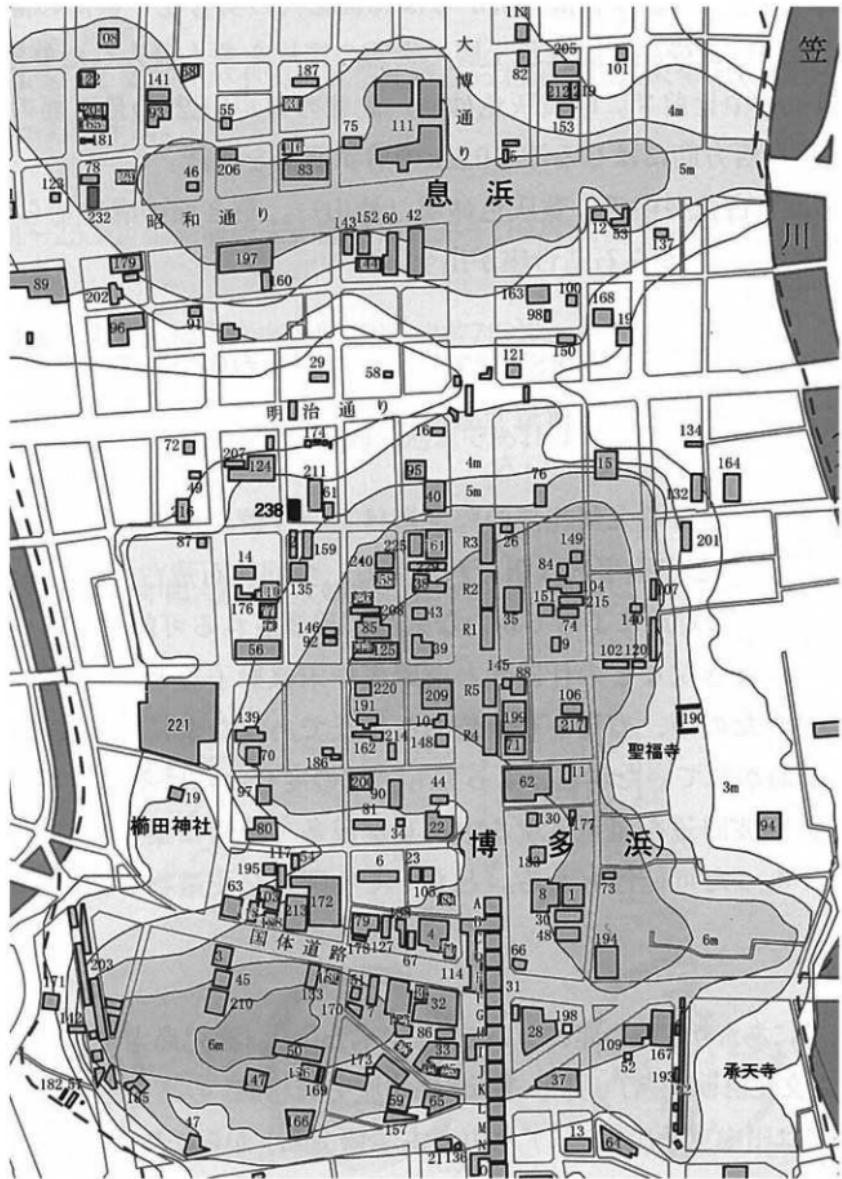
博多遺跡群は福岡平野のはば中央、那珂川（博多川）と御笠川（石堂川）に挟まれた古砂丘上に立地する。現在の地理で言えば、JR 博多駅から北西へ、湾岸の福岡サンパレスまでまっすぐに伸びる大博通りを中心軸とした東西 0.8 km、南北 1.5 km の範囲である。

博多遺跡群は南北に 3 列の砂丘が並んでおり、内陸側の 2 砂丘を「博多浜」、海側の砂丘を「息浜」と称している。この 2 つの浜が接する部分は古くは川が流れ、10・11 世紀頃は湿地であったが、やがて埋め立てにより両砂丘をつなぐ陸橋が作られ、13 世紀にはこの陸橋を越えて人々の生活領域が息浜に及んだが、その後の埋め立てでは陸橋部の周辺に留まり、17 世紀初めまで北東と南西から食い込むような形で入り江が残っていた。

今回の第 238 次調査地点は、この 2 つの浜が接する陸橋部から南西にやや離れた位置にあたり、近辺の調査では砂丘砂は確認されず、検出された遺構は 14 世紀以降に留まっている。



第1図 博多遺跡群位置図(1/25,000)



第2図 第238次調査地点位置図①(1/5,000)



第3図 第238次調査地点位置図②(1/1000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

調査地の現況は宅地である。調査着手前に事業者によって敷地の四周に鋼矢板（シートパイル）による山留め工事が行われ、試掘調査の結果をもとに調査開始面である現地表下 G L - 200 cmまでの表土鋤取りを事業者が用意した重機で行った。ちなみに調査地南端に接する現道路面の標高が 4.55mである。大量の排土が出ることから、まず調査地の北半分（1 区）を調査し、その排土を南側に置く。1 区の調査終了時に排土を場外に搬出し、その後、調査地の南半分（2 区）の調査を行なった。

1 区では遺構を掘り進めながら土層堆積の状況の確認し、結果的に 3 面について調査を行なった。2 区でも同様に 3 面の調査を実施した。2 区第 1 面を調査している時点で年度が替わり、上角が異動となったために、佐藤が引き継いで調査を担当した。

【第1面】

第 1 面は江戸時代から明治時代の初め頃の遺構面である（第 4 図）。1 区の標高は 2.5m である。北半の 1 区では井戸 4 基と铸造遺構 SX05、廐土坑 SK13、壁沿いと底に炭を充填した土坑 SK07、溝などを検出した。調査区西側は黄灰色砂の地山が分布しており遺構検出が容易であったが、それ以外は緑灰色土を主として不均質な暗い色の地山であり遺構がわかりにくかった。铸造関連遺構周辺の包含層埋土から鉄滓が比較的多く出土した。南半の 2 区では建物の基礎 SX31、SB32 と石油ランプ等を廐棄したごみ穴 SK33などを検出した。

【第2面】

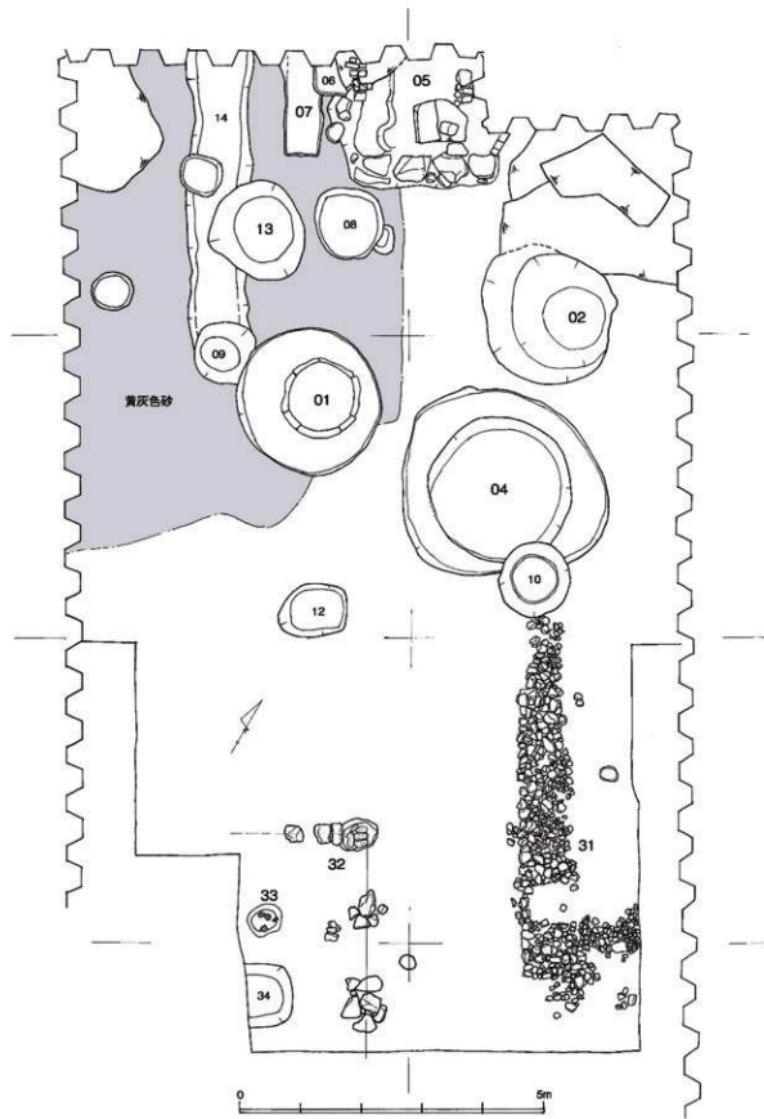
第 2 面は中世後半（15～16 世紀）の遺構面で、標高 2.2～2.3m である（第 5 図）。北半の 1 区では土坑数基を検出した。また、調査区中央付近に拳大～人頭大の石が集中して検出される部分がある。井戸などの大きな遺構によって分断されておりそれぞれ別の遺構番号を付したが、掘り上げた後に図化してみると、現在の区割り方向と同一方向に直線的に並んでいる。おそらくもともとは帶状に積石が分布していたのだろう。第 3 面で後述する大溝 SD30 の西側の肩の位置と重なるのも意味があるのだろう。また、第 1 面から第 2 面に包含層を掘り下げていく途中で、1 面の铸造遺構 SX05 周辺の位置で面上に鉄滓や焼土・炭などが広がる層が複数確認された。本地点における铸造の営みは短期間に限定されるものではなく、一程度の時期幅をもって継続されたものと推測する。2 区では東側を縱断する溝 SD40 や土坑、積石遺構を検出した。

【第3面】

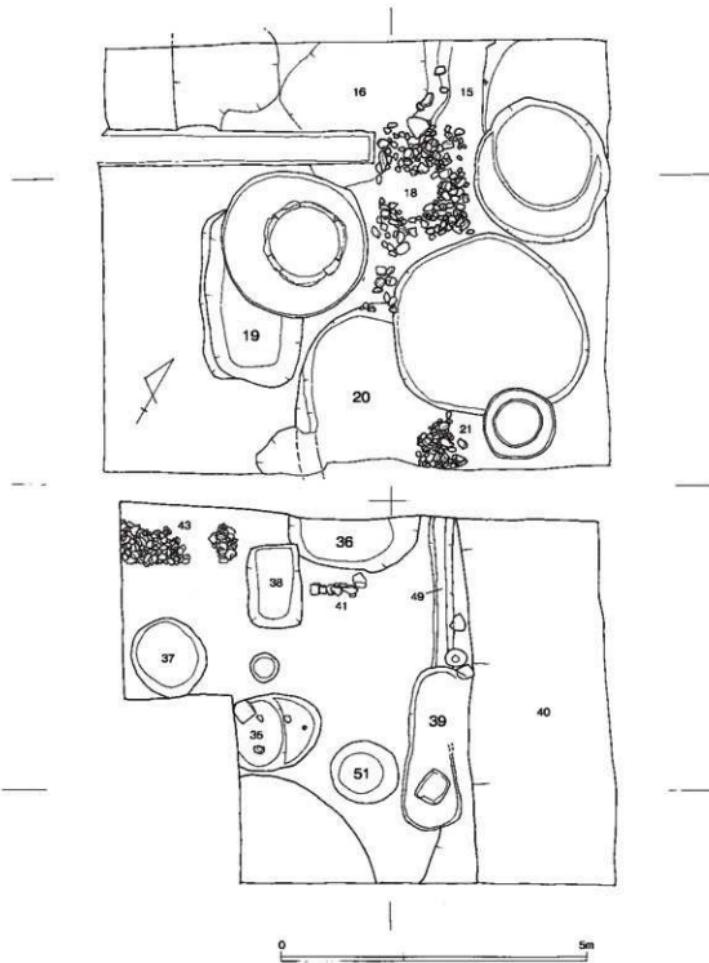
第 3 面は中世後半の遺構面で、標高 1.4～1.5m である（第 6 図）。1 区西半の地山は緑灰白色砂であり、井戸 2 基を検出した。1 区東側には暗灰色粘土が広く分布しており、調査区東半を縱断する大溝 SD30 であった。第 7 図の土層図に示すように、上端で幅 3.6m、湧水する標高 0.8m レベルで幅 2.6m、深さ 1.2m 以上を測る。遺構完掘後に、西半の地山を掘り抜いてみたところ、厚さ 2～3 cm の薄い砂層が幾層も重なっており、更にその下には緑灰褐色砂層が厚く堆積しており標高 0.8m 付近で湧水を見る。本調査地点の地山は水成堆積によるもので、砂丘砂は検出されなかった。2 区では中央を縱断する SD54、土坑、細い溝、ピットなどを検出した。

【層序】

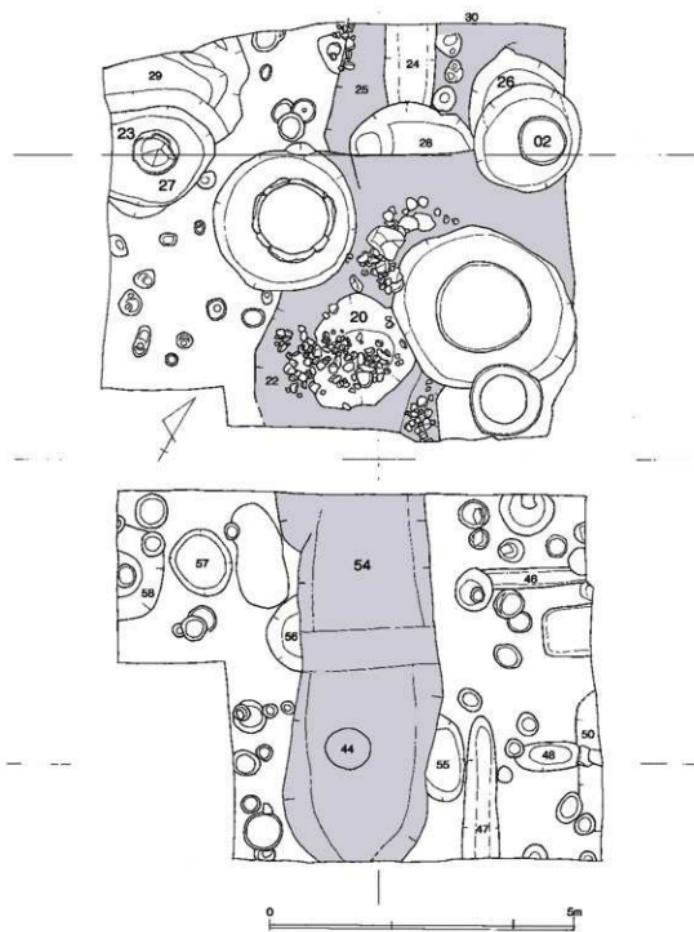
第 7 図に土層断面図を示す。調査区北壁土層図は第 2 面の 1 区の北壁、1 区ベルト土層図は第 2 面遺構配置図で 1 区西半の北寄りにベルトを残しているところの南壁のラインで作図した。北壁土層図では調査区の東半に大溝があることがわかる。1 区ベルト土層図では多くの遺構が切り合っている。



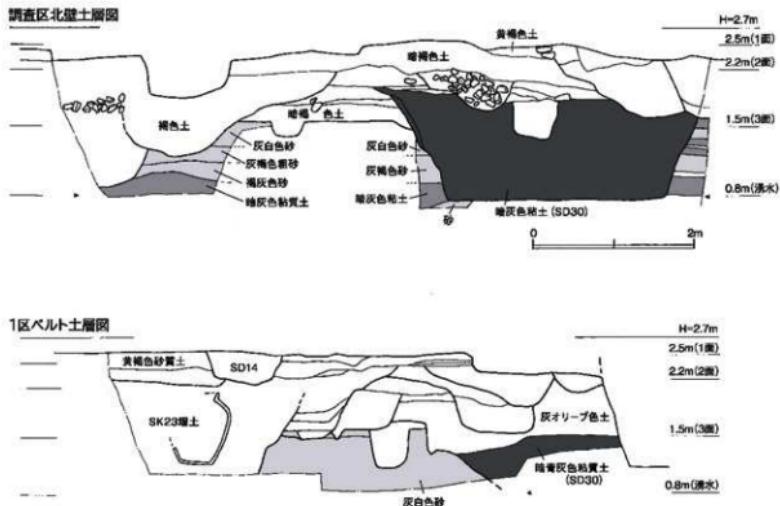
第4図 第1面遺構配置図(1/80)



第5図 第2面遺構配置図(1/80)



第6図 第3面造構配置図(1/80)



第7図 調査区北壁および1区ベルト土層図(1/60)

いずれの土層図を見ても、第3面とした標高1.5mより下に水成堆積層が厚く堆積している。周辺の既往の調査結果から予測されていたことであるが、本調査地は中世後半の段階では博多浜の古砂丘線辺の入江であったことが確認できた。

2. 近世・近代の遺構と遺物

第1面（第4図）で検出した主な遺構について報告する。

【建物跡】

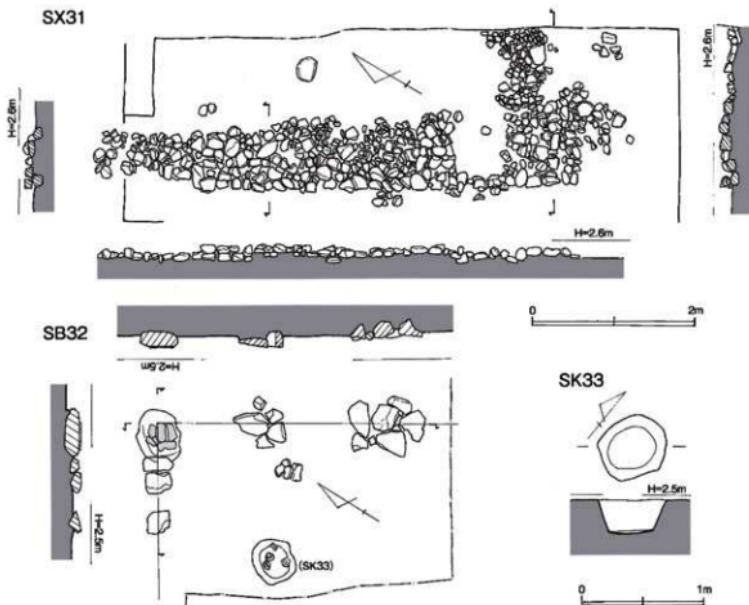
SX31（第8図・写真7）

直径20cm以下の小石を帯状に敷き詰めた遺構でL字型に曲がり調査区外へと延びる。南北方向に長さ6.8mを検出し、北側は井戸SE10によって切られている。東西方向には長さ2.0mを検出し調査区外へと続く。西側のラインがきれいに描っており、南側も大きめの石が直線的に並ぶラインがある。断面を見ると1~2段積まれており標高24mの面に水平に並ぶ。建物の基礎を細長く掘る布地形に割栗石を敷き詰めたものであろう。

第9図5は土師器小皿である。口径6.8cm、器高1.4cm、底径3.0cm。回転糸切り、灰黄色。

SB32（第8図・写真13）

建物の礎石で、南北に3つが14m間隔で並び、北端の石から西方向にも直角に折れて続いていたようだが、石は残っていない。前掲の布掘りの基礎SX31と主軸方向が一致する。礎石は自然石をそのまま使っている。北端の直径80cmの大石の表面には灰白色の物質が付着している。セメントだろ



第8図 近世・近代の遺構実測図①(1/60, 1/40) SX31-SB32は1/60, SK33は1/40

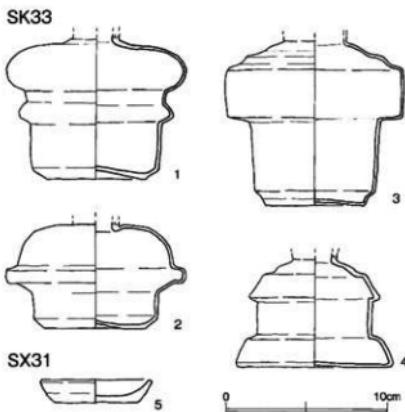
うか。セメントの国内生産は 1875 (明治 8) 年に始まり、1881 (明治 14) 年には最初の民営セメント会社小野田セメントが山口県に設立されている。

【ごみ穴】

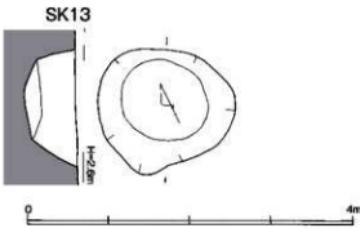
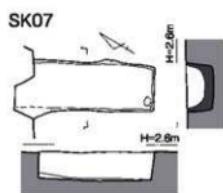
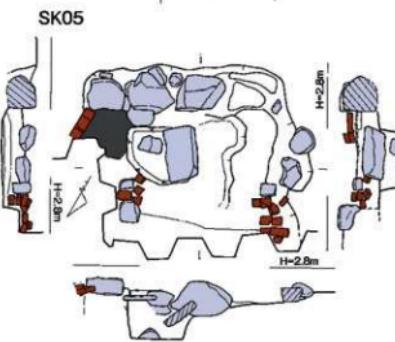
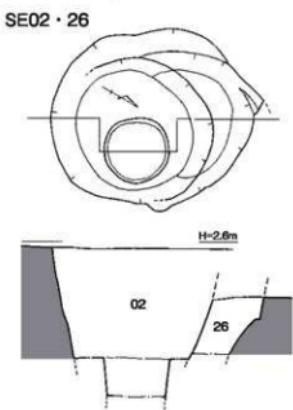
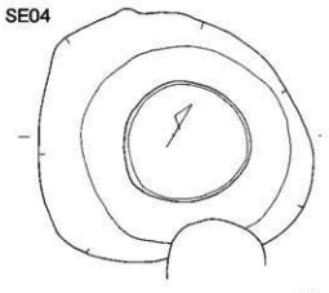
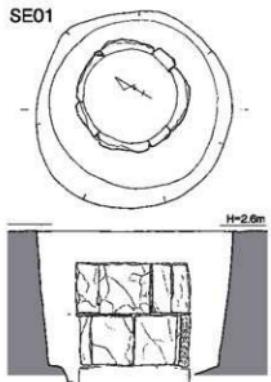
SK33 (第8図・写真14)

55×50 cm の略円形、深さ 30 cm を測る。ごみ穴で、焼土に混じって石油ランプ (洋燈) のガラス製燃料タンクや金属製の口金が出土した。石油ランプは 1875 (明治 8) 年にアメリカから輸入され、装置の簡便さと価格の安さから広く普及していった (高村直助「明かり」の近代) [日本歴史館] 1993 年、小学館、p908)。

第9図 1~4 はガラス製の石油ランプ燃料タンクである。3 で最大径 11.0 cm、器高



第9図 近世・近代の出土遺物実測図①(1/3)



第10図 近世・近代の遺構実測図②(1/60)

10.3 cm、底径 7.2 cm を測る。ガラスの色調は 1・2 が透明、3 が薄い緑色、4 が茶色を呈する。

【井戸】

SE01 (第 10 図・写真 8)

掘方は直径 2.4 m の円形で垂直に近い角度で掘っている。井戸桶は直径 1.4 m の円形で、砂岩製の部材を 7 枚程度組み合わせて一周させる。井戸桶の石材は高さ 65 ~ 68 cm、厚さは 10 cm 以内で幅は 30 cm のものから 80 cm のものまである。石材のすき間を漆喰で埋めて接着している。石材の加工の仕方が興味深い。内側はきれいな弧状で表面をなめらかに仕上げている。外側は粗く削っており堅の痕跡がひとつひとつ顕著に残っている部材もある。非常に精巧な作りである。博多遺跡群の発掘調査を数多く担当されていたベテラン職員に聞いてみたが、同様の井戸桶は見たことがないとのことであった。標高 0.8 m 付近で湧水した。中世後半から近世にかけての遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

SE02・26 (第 10 図)

掘方が直径 2.1 ~ 2.5 m の楕円形を呈する井戸である。SE02 として掘り進めたが、第 3 面まで掘り下げたところで SE26 と切り合っていることを確認した。標高 0.8 m で湧水した。SE02 からは近世の遺物を主としてコンテナ 9 箱分、SE26 からは中世の遺物 1 箱分が出土した。第 11 図 6 は鬼瓦である。

巾着 (宝袋) をモチーフとしたもので、袋の口から口を結ぶ飾り紐の部分が残っている。

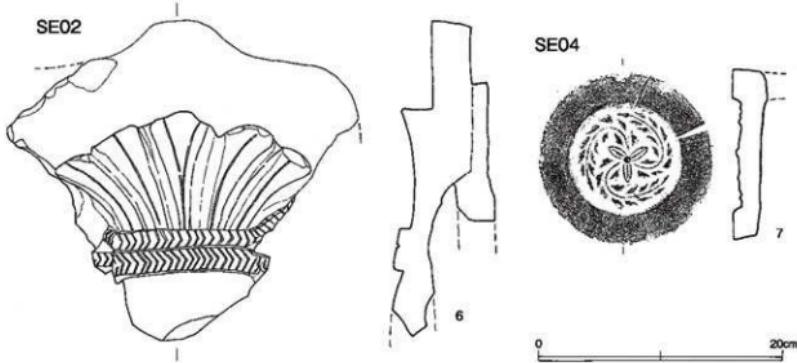
SE04 (第 10 図)

掘方が 3.0 ~ 3.4 m の略円形を呈する井戸である。標高 0.7 m で湧水した。近世の遺物を主としてコンテナ 9 箱分が出土した。第 11 図 7 は軒丸瓦である。直径 14.2 cm で福岡藩主黒田家の家紋である藤巴紋である。近代以降のものか。

【鉄造関連遺構】

SK05 (第 10 図・写真 9)

遺構の壁沿いに石と煉瓦を組み合わせて積んだ土坑で、東西辺が 2.4 m、南北辺が 2.0 m 検出し調査区外へと続く。内部の土に赤煉瓦片、鉄滓、焼土が大量に含まれていた。遺構の真上に擾乱が入っており、SK05 の中央に底面より深くまで擾乱が達し、そこに SK05 の壁を形成していただろう大きな石が落ち込んでいる。遺構の東側は浅いところに炭が面的に広がっていた。具体的な様相は不明で



第 11 図 近世・近代の出土遺物実測図②(1/4)

あるが、何らかの铸造遺構であろう。近世から近代にかけての遺物がコンテナ 0.5 箱分出土した。

SK07 (第 10 図・写真 10)

幅 0.6m、長さ 1.7m 以上、深さ 35 cm の細長い土坑である。遺構検出時から土坑の輪郭に沿って炭が入っていた。壁沿いと床面に真っ黒な炭の層があり、土坑内部は灰褐色砂質土で鉄滓を含む。炭は含まない。近世の遺物コンテナ 2 箱分が出土した。

SK13 (第 10 図)

直径 1.4 ~ 1.7m の楕円形の土坑で深さ 60 cm が残る。埋土は暗赤褐色土で鉄滓、炭がかなり出土した。近世の遺物コンテナ 1 箱分が出土した。

3. 中世の遺構と遺物

第 2 面 (第 5 図)、第 3 面 (第 6 図) で検出した主な遺構について報告する。

SK23・SE27 (第 12 図・写真 11)

直径 2.2m ほどの掘方を持つ井戸である。遺構検出直後は備前系の大甕を埋置した土坑と認識していたが、甕の埋置にしては土坑が大きすぎる点が気になっていた。記録後に大甕を取りのぞくと、真下から結構構造の井戸枠が検出されたので井戸とわかった。大甕を出すために除去したが、大甕の周囲にも薄い木質が検出された部分があった。大甕は 16 世紀頃のものである。結構構造の井戸として利用し、その後、中世末ごろに井戸枠の中に大甕を落とし込んだものと思われる。第 14 図 35 は饅頭心タイプの青花碗である。36 は白磁の皿である。

SE51 (第 12 図)

直径 1.1m の小型の井戸である。第 14 図 37 は龍泉窯系青磁碗である。12 世紀中頃～後半。本調査地ではこの時期の陶磁器はごく少量しか出土していない。38 は白磁の皿。39 は土師器の皿。40 は滑石製石鍋である。41 は土師器の甕である。口径 18.5 cm、器高 26.5 cm を測り、ほぼ完存する。古墳時代後期の甕に見える。なぜ完形に近い遺物が出土したのか謎である。古墳時代の土器は他には出土していない。

SK19 (第 12 図)

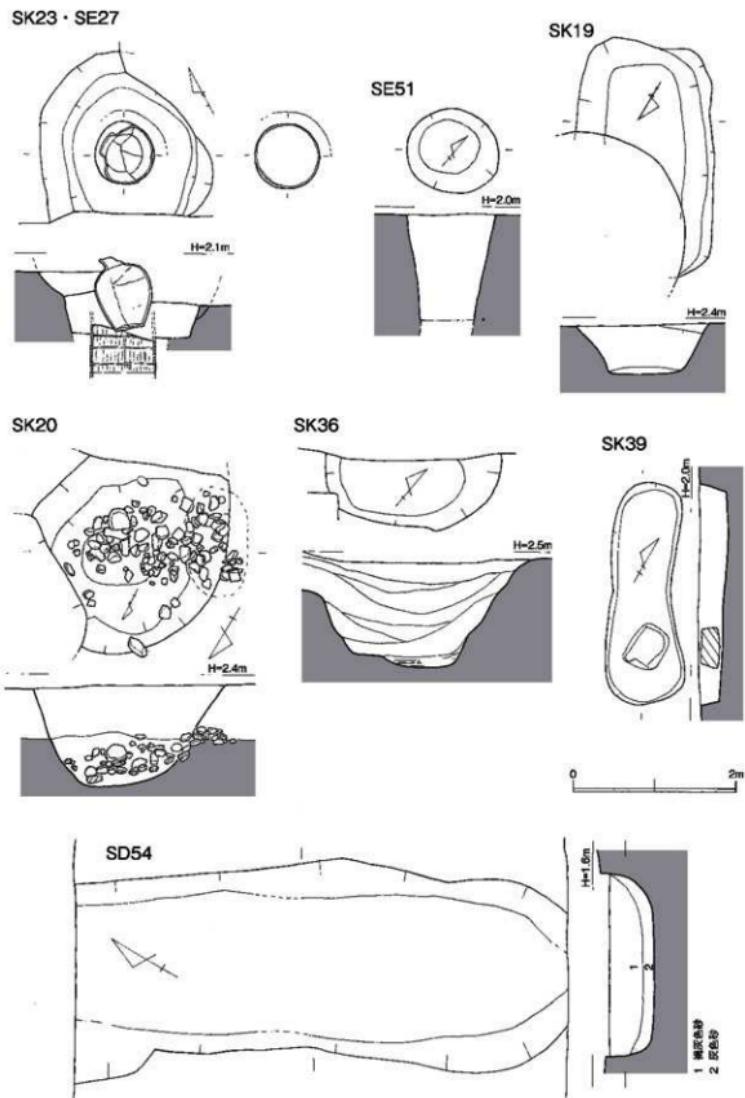
長辺 3.0m、短辺 1.7m、深さ 60 cm の土坑で井戸 SE01 に切られる。埋土は黒色土で炭化物、橙色粘土の小ブロックを多く含む。第 13 図 8 ~ 10 は饅頭心タイプの青花碗である。11 ~ 13 は土師器の壺である。器壁が薄く内面にろくろ成形時にできた稜線が明瞭に残っている。14 ~ 16 は土師器の小皿である。

SK20 (第 12 図)

直径約 2.3m の略円形の土坑である。第 2 面で検出、埋土は赤味を帯びた灰色粘質土である。周辺には集石が見られるのに、SK20 内には石がほとんどなかった。深さ 60 cm まで下げるとき、石が大量に出てきた。当時の人がこの土坑を掘るときに石を埋め戻したのかと思ったが、集石は遺構の範囲の外まで続くことが確認されたので、集石の上面が SK20 の底なのかもしれない。第 13 図 17 ~ 19 は基筒底の青花皿である。20 は青磁碗で外面に細蓮弁文を施す。明緑灰色。21 は磁州窯の鉄絵壺の破片である。22 は硯で両面に海を設ける。図上側の面はなめらかで実際に使われたようだが、下側の面はややザラザラしている。赤褐色を呈しており、赤間硯であろう。

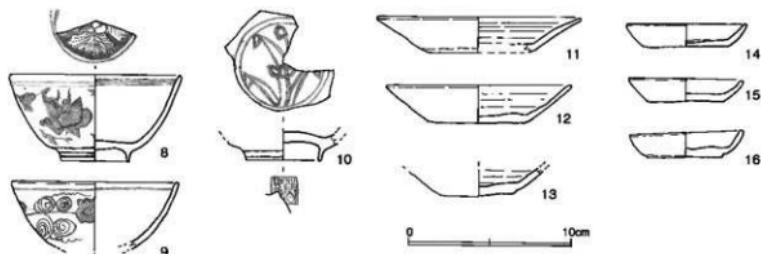
SK36 (第 12 図)

長辺 2.2m、深さ 130 cm の土坑である。第 13 図 23 は青花の碗である。24 は青花の皿で基筒底を

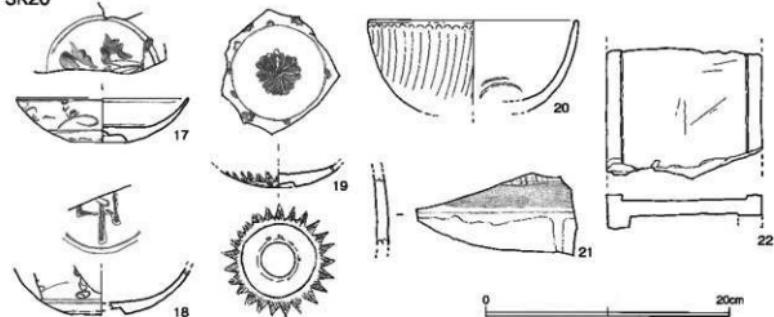


第12図 中世後半の遺構実測図(1/60)

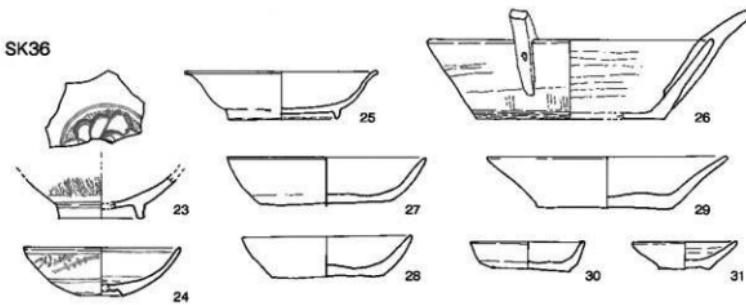
SK19



SK20



SK36

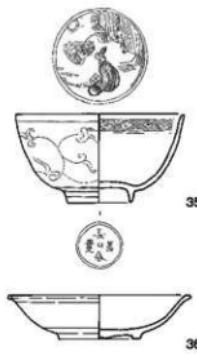


SK39

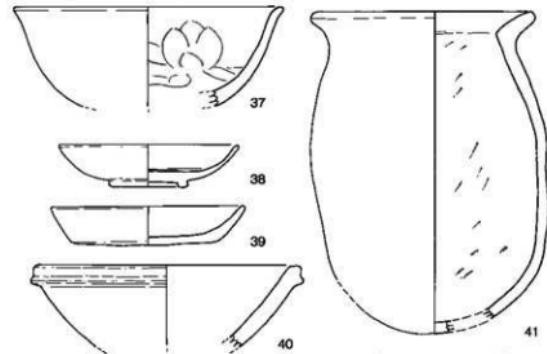


第13図 中世後半の出土遺物実測図①(1/3、1/4) 26は1/4、他は1/3

SK23

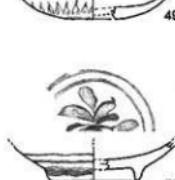
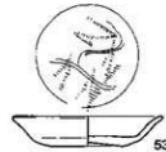
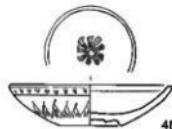
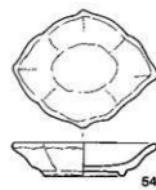
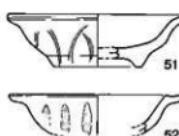


SE51



0 10cm

SD54



0 10cm

第14図 中世後半の出土遺物実測図②(1/3、1/4) 40-41-57は1/4、他は1/3

呈する。25は白磁の皿である。26は土師質の熔炉である。口径23.4cm、器高6.5cm、底径15.4cmを測り、取手が一つつく。27～29は土師器の壺。30・31は土師器の小皿である。

SK39（第12図）

長辺2.7m、短辺0.8～1.0m、深さ35cmの細長い楕円形土坑である。第13図32は青花碗である。33は青磁碗の口縁部で外面に雷文帯を刻む。34は象嵌青磁の壺である。白色と黒色2色の化粧土を象嵌する。

SD50（第6・7図・写真12）

調査区北半1区の東側で検出した大溝である。調査区北壁土層部分で上部の幅4.0mを測り、深さ1.3mまで掘り下がったところで湧水した。湧水レベルでの幅が2.7mである。井戸によって切られているため詳細が確認できないが、途中から幅が狭くなり、2区のSD54へつながる。SD30とSD54の新旧関係は不明。

SD54（第12図）

幅2.3m、深さ60cmの溝である。第14図42は青磁碗である。43は白磁壺の口縁部である。

【その他の出土遺物】

第14図44～46は饅頭心タイプの青花碗である。16世紀。47～49は基筒底の青花皿である。15世紀後半～16世紀。50は陶器碗で内面見込みに赤色と薄緑色で施文する。51は青磁皿で外面に蓮弁文、釉は濃緑色で厚い。52は青磁皿で口縁部は鈎縁。釉は緑灰色で不透明。53は青磁の皿で見込みに櫛書き文を施す。12世紀中頃～後半。1区第3面の地山砂層から出土した。54は白磁の稜花皿である。型作りで肉厚。完形品。55は青白磁の菩薩像の頭部である。56は象嵌青磁の皿である。白色化粧土で象嵌する。57は磁州窯の白磁鉄絵壺である。元代。

第4章　まとめ

今回の博多遺跡群第238次調査では、計3面について発掘調査を行なった。第1面は江戸時代から明治時代初期にかけての遺構面であり、建物の基礎石や井戸、鋳造遺構などを検出した。ごみ穴から石油ランプのガラス製燃料タンクや口金が4点以上出土した。第2面、第3面は中世後半、15～16世紀ごろの遺構面である。第2面では井戸、大溝、土坑、集石遺構などを検出した。第3面では溝、土坑、柱穴を検出した。中世後半の大溝が敷地の東半分を現在の街区と同じ方向に縱断している。饅頭心タイプの青花の碗や基筒底の青花皿が多く見られる。

本調査地では古砂丘砂の面は確認できず、第3面の地山とした水成堆積層上に15世紀頃から遺構が営まれ始める。つまり、本地点は博多浜のくびれ部に西側から入り江が入り込む地点に位置しており、土地利用が中世後半以降と博多遺跡群の中では開発が遅れる区域であることが確認された。



写真3 1区第2面全景(南から)



写真4 2区第2面全景(北から)

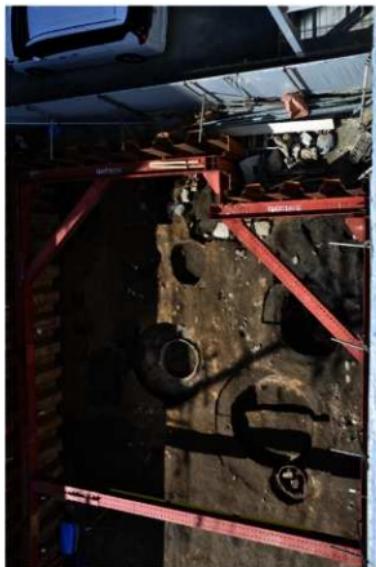


写真1 1区第1面全景(北東から)



写真2 2区第1面全景(北から)



写真7 SX31(南から)



写真8 SE01(南西から)



写真5 1区第3面全景(東から)



写真6 2区第3面全景(北から)



写真9 SK05(南東から)



写真10 SK07(南東から)



写真11 SE27井戸枠(南西から)



写真12 大溝SD30(東から)



写真13 SB32(北西から)



写真14 SK33(北東から)



写真15 調査区北壁土肩(南東から)



写真16 SK33出土石油ランプのガラス容器



写真18 SE02出土鬼瓦



写真17 SK33出土石油ランプの口金



写真19 SE04出土軒丸瓦



写真20 SK20出土硯



写真21 SK39出土象嵌青磁



50

写真22 1~2面包含層出土陶器碗



55

写真23 第1面出土青白磁菩薩像



56

写真24 SK55出土象嵌青磁

報告書抄録							
ふりがな	はかた						
書名	博多187						
副書名	第238次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1454集						
編著者名	上角智希						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2022年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はかた いせき ぐん 博多遺跡群 第238次調査	ふくおかし はかたくてんやまち 福岡市博多区店屋町 186番1、186番2、 187番3	40132	0121	33°35'45" 130°24'33" ~ 20200424	20200115 ~ 20200424	141	記録保存調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	集落跡	中世・近世	井戸、土坑、溝	土師器、青花・ 白磁・瓦			
要約	計3面について調査し、15~16世紀頃の井戸・大溝・土坑等、近世~近代初頭の建物基礎・井戸・土坑等を検出した。						

